

志望動機

第19期生 鈴木 智也

僕が、2年前の小野ゼミの入会選考用エントリーシートに、どんな志望動機を書いたかということを、僕はあまりはっきりと思い出すことができません。もちろん、僕が入会選考当日に、後に先輩となる第18期生と大学院生、そして小野先生に対してどんなことを話したのかということも、ほとんど思い出すことができません。なぜ思い出すことができないかというと、当時の僕は、まともな志望動機を作り上げることもできずに、直感だけで小野ゼミを志望していたからです。その直感とは、「小野ゼミでなら、かけがえのない仲間と出会い、その仲間と素敵な思い出を作れるかもしれない」という、なんとも漠然としたものでした。

今までの大学生活を振り返ると、僕の日吉時代はあまり明るく楽しいものではありませんでした。1年生の時は、これといってやりたいこともないまま、時間が過ぎていく焦りをスマホとバイトで紛らせて過ごし、2年生の時は、コロナの影響で何もできないことを言い訳にぐうたらと過ごしていました。結局、「新しいサークルに入って、新しいことに挑戦してみたい」「海外旅行に行って、みたことないもの、食べたことないものに会いたい」といった入学当初の新鮮な想いは消え、新しい仲間との出会いも、初めての挑戦もまともにはできませんでした。だから、3年生からは、「一生涯の仲間と出会い、新しいことに挑戦するぞ」という、漠然とした想いだけを頼りに、当時の僕は入会選考に挑みました。そして迎えた面接当日、なんとか入ゼミを認められたものの、ゼミへの想いを言語化できない僕の面接は、ひどいものでした。

しかし、小野ゼミで濃密な2年間を過ごすことができた今ならば、2年生だった当時の僕が一体何を求めていたのか、はっきりとわかります。やさしくて、面白くて、熱いハートを持った同期、常に優しく指導してくれる先輩、かわいい後輩、そして何より常に僕たちのことを気にかけてくれ、僕たちの成長のために尽力してくださる小野先生という、小野ゼミにいたからこそ出会うことができた方々。皆と一緒に乗り越えられた、三田論、卒論、ビジコンといった数多くの経験。これらこそが、僕が2年生の時の僕が求めていたことの全てでした。

もしも僕が、2年生の時に戻る世界線が存在したら、その時は、「19期、18期や大学院生の先輩、20期のみんな、そして小野先生と出会い、人生で最高のメンバーとこの先もずっと過ごしたいから」とはっきりと宣言して、もう一度小野ゼミに入りたい。そう本気で思える2年間でした。

最後になりましたが、僕が小野ゼミに入り、出会うことができた皆様に感謝申し上げます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。小野ゼミに所属して得られたこの一生ものの出会いが途切れることのないよう、また皆様とお酒を飲みながらお話できたら嬉しいです。これからもよろしく願います。